

ゼロ年代の少女マンガが描く女性像 —矢沢あい『NANA』におけるジェンダー—

中川 裕美

本研究は、矢沢あいの『NANA』を分析の対象とし、そこに描かれたジェンダー表象について明らかにすることを目的としている。『NANA』は、これまでの少女マンガが描いてきたようなロマンティックな恋愛ではなく、妊娠を伴う性愛をリアルに描いた作品として人気を得てきた。しかし、分析の結果『NANA』には、内容の過激さとは相反する古典的な性別役割が多数描かれており、そうしたステレオタイプの男女関係が、「理想的な家族／家庭像」や「理想的な母親像」にも及んでいることを明らかにした。

はじめに

『NANA』は、集英社より発行されている少女向けマンガ雑誌『Cookie』に、1999（平成11）年に読み切り作品として登場、翌年の2000（平成12）年より連載化された矢沢あいの作品である。現在までに単行本21巻を刊行、マンガだけではなく、映画、アニメ、ゲーム、トリビュートアルバムなどのメディアミックスも展開されている大ヒット作品である。

『NANA』には二人の主人公が登場する。一人は小松奈々、もう一人は大崎ナナである。二人のナナが上京するために乗った新幹線の中で出会うところから物語は始まる。

小松奈々は地元で付き合いしていた恋人が東京の美術大学に進学したため、大崎ナナはプロのミュージシャンになるという夢を叶えるため、それぞれ故郷を捨てて上京する。名前が同じ「ナナ」であるということから意気投合した二人は、偶然のきっかけからルームシェアをすることとなり、同居を始める。「恋人と一緒に居たい」という受け身の夢しかない小松奈々は、「プロのボーカルを目指す」という主体的な夢に向かって努力する大崎ナナを眩しい存在であると感じ、信望するようになっていく。一方の大崎ナナは、地元で組んでいたバンドのメンバーが彼女を追って上京してきたことをきっかけに、本格的に夢へと突き進んでいくことになる。しかし実際には夢の実現はそれほど簡単には行かず、大崎ナナを含めたバンドのメンバーは夢と現実の狭間で苦悶しながら懸命に生きていく。そんなナナを応援しながら、奈々は「たった一人の恋人」を探すために一生懸命恋愛を頑張るのである。

この二人の「ナナ」を中心に、物語は複雑に入り組んだ人間関係が描かれていく。

これまでに『NANA』を取り上げた批評や研究論文を概観すると、この作品がヒットした＝広く受け入れられた理由として、(1) 他の少女マンガに比べて恋愛や友情に悩み苦しむという現実的な物語であること、(2) 登場人物たちのファッションセンスが高いこと、(3) 恋愛物語に音楽というキーワードを組み込むことによって作品がスタイリッシュになっていること、(4) 対照的な性格の主人公を二人登場させることによって、読み手がどちらかに感情移入しながら

読むことが出来る作りとなっていること、が指摘されている。

本研究では『NANA』分析を通して、若者のジェンダーがどのように描かれているのかを明らかにするとともに、この作品がどのように読者の心をとらえたのかについて考察を行う。

1. 『NANA』におけるジェンダー表象

1.1 “らしさ”の規範

『NANA』の中で「働く」「社会関係を築く」ということがどのように描かれ、そこにどのような価値観が現れているのだろうか。

表 1-1 は、主要登場人物の性別、職業、恋愛関係について示したものである。女性が 10 人、男性が 8 人で、その職業は美術大学に通う学生を除くと芸能関係者が多い。

表 1-1 主要な登場人物の紹介

	名前	職業	恋人関係になったキャラクター
女性	小松奈々	フリーター→派遣社員→無職→専業主婦	浅野→章司→ノブ→タクミ
	ナナ (大崎ナナ)	フリーター→バンド・ブラックストーンのボーカル	レン
	レイラ (芹沢レイラ)	バンド・トラップネストのボーカル (作詞担当)	ヤス→シン
	上原美里	ナナのおっかけ→ブラックストーンのマネージャー	
	早乙女淳子	美大生	京助
	幸子	大学生	章司
	香坂百合 (松本朝海)	AV女優	ノブ
	美雨 (篠田美雨)	売れない女優	ヤス
	詩音	ブラックストーンのおっかけ	ヤス
	凌子	スチュワーデス→薬物による逮捕	シン
男性	ヤス (高木泰士)	弁護士事務所 (見習い) →ブラックストーンのドラム (リーダー)	レイラ→美雨
	ノブ (寺崎伸夫)	バイト→ブラックストーンのギター (作曲担当)	奈々→百合
	タクミ (一ノ瀬巧)	トラップネストのベース (リーダー)	不特定多数→奈々
	レン (本城蓮)	トラップネストのギター (作曲担当)	奈々
	ナオキ (藤枝直樹)	トラップネストのドラム	
	高倉京助	美大生	淳子
	遠藤章司	美大生	奈々→幸子
	諸星銀平	ブラックストーンのマネージャー	

※ () 内本名

※21巻現在

主人公の小松奈々は高校卒業後から地元での専門学校時代、上京後まで定職についての描写はなされず、アルバイトで生活費を稼いでいる。稼いだアルバイト代のほとんどを服と小物に注いでいた奈々には貯金がなく、上京後数ヶ月で生活資金がなくなってしまう。この段階に至ってもナナを含む友人たちに「金は貸さない」と言い切られたため、求人情報誌で見つけた小さな出版社に勤め始める。勤め先を出版社に決めた理由を奈々はこう語る。

「あたしがその仕事を選んだ第一の理由は 販売と違って 土日が休みだったから 平日は学校とバイトで会えない章司と 一緒にいられる時間を 少しでも増やせると思ったから」
(3巻)

この奈々のセリフからは、就職先を決める際も「賃金」や「仕事の内容」ではなく、恋人と

の関係の方が重要であるという奈々の価値観が読み取れる。こうした奈々の価値観は、出版社での仕事が始まってからも変わらない。仕事の内容を「そうじ お茶くみ コピー取り 原稿取り 雑誌の内容とは全く関係ない 簡単な小間使いばかり」「社員は枯れたオヤジばっかだし 若いのがいてもあんなだし あたしは いったい何を楽しみに この職場に来ればいいのか？」(3巻)と会社への不満を募らせていく。仕事への意欲も責任感もない奈々は、仕事中に化粧をしたり、携帯電話でメールをしたり、早退、遅刻などの行為を繰り返した結果、会社を解雇されてしまう。初めて働いた会社を自分の我が儘で解雇されるという経験も、彼女の人生や価値観にほとんど影響を与えない。この後奈々は定職につくことがないまま、人気バンドのリーダーであるタクミの子どもを妊娠し、与えられた広い部屋と多額の小遣いを自由に使うことが出来る専業主婦としての生活を始めることになる。

もともと社会的な繋がりを全く持たない奈々は、タクミとの生活を始めてからその傾向はより深まる。生まれてくる子どものための靴下を編み、与えられた豪邸を飾り付け、仕事から戻ってくる旦那のために料理を作り、癒しのための家庭を作るための努力を惜しまない。奈々の生活はタクミと生まれてくる子どものためだけのものとなり、そのことについて本人は疑問も不満も感じている様子は見られない。

地元にいる頃は親の庇護の元に生き、結婚してからは夫の庇護の元に生きる。奈々のこうした生き方は、「べつにやりがいのある 仕事なんか見つからなくても 愛する人の為に 毎日ごはん作って 暮らしたら それが一番幸せなのにな あたし的に」という本人の希望そのものであり、その意味において彼女は自分の望む通りの人生を全うしているといえる。

もう一人の主人公であるナナもまた、プロのレコード会社と契約を結ぶまでの間はアルバイトで生計を立てている。レコード会社と契約を結んだ後もスタジオ代を浮かすことが出来る程度で、音楽だけで生計が立てられるには至らない。

奈々とは違い、親に捨てられた天涯孤独の身であるナナを支えるのは、恋人であり日本のミュージックシーンをリードする人気バンドのギタリストであるレンと、インディーズ時代からの熱狂的なファンである上原美里である。バンドのメンバーであるシンによる、「だいたいナナさんこそ その新しいギター どうしたの？ フツのバイト代で 買えるとは 思えないけど (中略) じゃあその服は？ 全部 美里ちゃんか レンからの貢ぎ物 なんでしょ？」(9巻)というセリフは、決してナナが経済的に自立出来ていないことを示唆するものである。「レンに抱かれる事だけがあたしの人生じゃねえんだ！ あたしも歌で飯が食えるようになりたい」(1巻)と言っていたナナの夢は、レンとの結婚によって更に実現が困難となる。

レンとの婚約以前にナナが事務所から与えられた寮の部屋はとて狭く、それに対して不平を述べたナナに対して、マネージャーの銀平は言う。「いい暮らしがしたいなら のし上がってみせなさいよ」(11巻)。銀平の挑発にナナもやる気になるが、奈々が「体育館」と表現する程に広い部屋を手に入れるきっかけとなったのは、ナナが「のし上がった」からではなく、レンとの関係によるものであった。

男から何かを与えられて生活するという事に疑問を持たない奈々に対して、ナナは夢を叶えて自立するという希望と、「レンの恋人」という立場でしか社会的な評価を与えられない現

実との乖離に悩み、苦しむ。しかしそうした彼女の懊悩は、最も近い距離にいるバンドのメンバーからでさえも「そんなに自分のプライドが大事か」と一蹴されてしまう。

このような二人の「ナナ」の生き方は、『NANA』に登場する他の女性キャラクターにも共通している¹⁾。

一方、男性キャラクターたちは社会的な行動が行なえる人物として描かれている。引っ越しの際における管理会社との契約から、プロのミュージシャンとしてのレコード事務所との契約、更にはゴシップ雑誌やマスコミへの対策などは、全て男性が担当している。また芸能界という特殊な世界に生きる彼らは、本音と建前を使い分け、仕事とプライベートを割り切り、自分たちがのし上がっていくためにはどのようなかけ引きが必要かを考えて行動する。

彼らは何故自分たちだけがそうした難しい判断を委ねられるのか、といった疑問や、そのことへの苦情を口にするには決してない。彼らが下した判断が絶対的であると同時に、彼らの役割もまた絶対的である。

デビューに関して「納得がいかない」と愚痴を口にしたノブに対し、ヤスは冷たく言い放つ。

「だったらいいかげん気づいたろ 世の中 必ずしも 正義が勝つようには出来てねえんだよ 負けたくねえんならしたたかなになれ もうちょっとずる賢くなれよ それが嫌なら寺島旅館に帰れ」(10巻)

高井範子・岡野孝治は伊藤裕子が作成した性役割測定尺度(表 1-2)を用いて、「男らしさ」「女らしさ」に関するアンケート調査を行っている。高井らの調査によれば、男性の「男らしさ」について回答頻度の高い内容は「頼りがい」「たくましい・強く・タフ」「包容力」「行動力・積極的」「決断力・判断力」「体力や筋肉」「優しい」「経済力」「勇気・度胸」「忍耐強い・努力家」「冷静・落ち着き」「リーダーシップ」などが上がっている²⁾。この結果を伊藤の性役割測定尺度に即すると、Masculinity(男性性)に分類される項目が多く選択されていることが明らかとなる。

ノブの側にいると「日なたぼっこ」をしているように温かい、と評されているノブの穏やかな性格も、社会を生き抜いていく上では評価の対象とはならない。男性キャラクターに優先的に求められているのは、Humanity(人間性)ではなく Masculinity(男性性)なのである。

『NANA』が描く女性/男性表象は、女性=感情的/男性=理性的、という非常に明確な対立構造で描かれている。少年・少女マンガの性役割ステレオタイプについて分析を行った青野篤子は、「泣く」という行為をステレオタイプ度の指標としている³⁾。青野の研究を参考に、『NANA』における泣いたシーンを調査した。図 1-1 はキャラクターが泣いたシーンの性別比率を示したものである。この図からも明らかなように、「泣く」という行為は女性キャラクターに偏向して描かれている。女性キャラクターの中で最も泣いていたのは奈々で、2巻では38回、約 4.5 ページに1回は泣いている。青野によれば少年/少女マンガ問わず、「女性が登場する 10 ページに1ページの割合で女性は泣くことになっている」という。この結果と比較すると、奈々の泣く頻度は非常に高いと言えよう。

表 1-2 伊藤裕子による M-H-F スケールの項目内容⁴⁾

Masculinity	Humanity	Femininity
<ul style="list-style-type: none"> ・冒険心に富んだ ・たくましい ・大胆な ・指導力のある ・信念を持った ・頼りがいのある ・行動力のある ・自己主張のできる ・意志の強い ・決断力のある 	<ul style="list-style-type: none"> ・忍耐強い ・心の広い ・頭のよい ・明るい ・あたたかい ・誠実な ・健康な ・率直な ・視野の広い ・自分の生き方のある 	<ul style="list-style-type: none"> ・かわいい ・優雅な ・色気のある ・献身的な ・愛嬌のある ・繊細な ・従順な ・静かな ・おしゃれな ・言葉遣いのていねいな

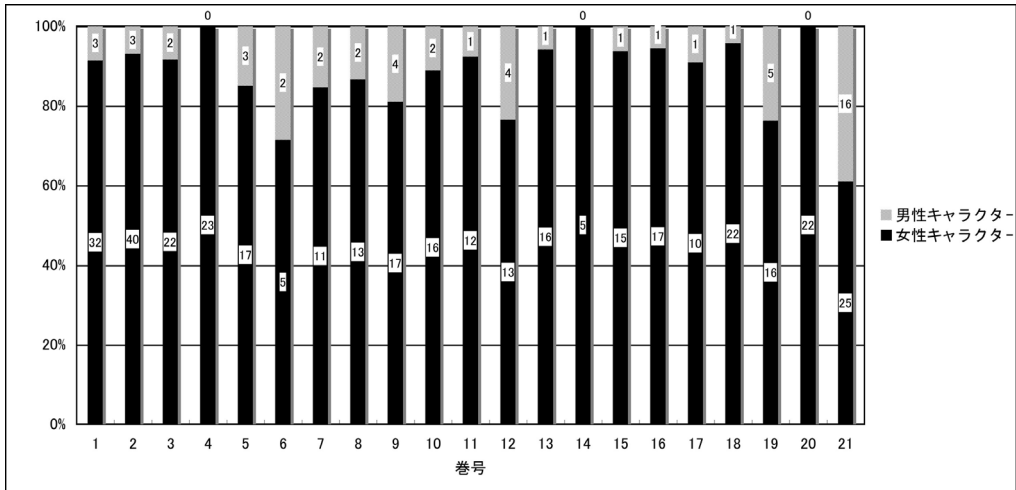


図 1-1 涙を流したシーンにおける性別比率

1.2 「耐える女」の表象

多くの論者によってすでに指摘されていることであるが、『NANA』における恋愛とは、かつての少女マンガに多く描かれていたような、一対のカップルが一途な愛により結婚に至る、というような描かれ方はなされていない。表 1-1 に示したように、主人公の奈々を始めとして、キャラクターは横断的な恋愛関係となっている。

作品の中で最も恋多き女として描かれているのは奈々である。作中における時間が一年未満しか経過していないにも関わらず、章司、ノブ、タクミの三人と恋人関係になっており、他にも格好いい男性を見るとすぐに好意を寄せてしまう恋多き女性である。

そんな奈々をナナとタクミはこう表現する。

「わがままで泣き虫で甘ったれで その上 異常なまでの恋愛体質で しかも移り気で 上京して半年足らずで 男はすでに3人目 なのに少しも汚れない 不思議な女だった」(8巻)

「奈々は現実が理想とは違う事 それなりにわかまえてるから どこで学んだんだか知らねえけど その上でヒネずに夢見がちだから かわいいんだよ」(9巻)

何故奈々が「少しも汚れない」のか。鈴木謙介は「ハチ(筆者注:奈々のこと)のような種類のイノセンスは、つまりは自分の幸せに対してひたむきなのだと言えるし、言い換えれば恋愛に関する問題をすべて自己のリスクとして引き受けるために可能になる」⁵⁾と指摘する。ここで指摘されている「恋愛に関する問題」とは男性と肉体的関係を持つことである。更に性行為と妊娠の危険性は表裏の関係として描かれている。『NANA』がファンタジックなラブロマンスを描いた少女マンガと一線を画しているのは、恋愛=性=妊娠、という問題を切り離さず、むしろ一つの問題として物語の主題としている点にあるだろう。

最初の恋人であった章司との関係が終わった後、奈々は日本を代表するミュージシャンであるタクミと身体だけの関係を始める。「あたし本当に タクミの事 好きなのかな タクミと寝たこと正当化したいだけなんじゃないかな もう分からない」とタクミとの関係に疑問を持ちながらも、「でももしタクミが 会いに来てくれたら あたしは結局また タクミと寝るんだ きっと拒めない あたし いったい何が欲しいんだろう こんな 流されてばかりじゃ何も掴めない」(6巻)と関係を切ることが出来ない。

奈々がタクミとの関係を終わらせようと決めるのは、新しい恋人であるノブが現れたためである。しかしノブとの恋人関係も長くは続かない。奈々がタクミの子どもを妊娠していることが分かったため、奈々とノブの関係は早々に終わってしまう。

奈々が妊娠していること分かったタクミは、子どもを自分の子どもとして認知し、けじめをつけるためだからと結婚を申し出る。避妊もせずに性行為を行い、女をセックスの相手だとしか思っていないと分かっているにも関わらず、奈々はタクミからの申し出に涙を流して喜ぶのである。そして自分を大切に思ってくれている友人たちを全て捨てて、タクミを選ぶのである。

奈々とタクミの非対等な関係性は、性行為のシーンに顕著に現れている。プロポーズの直後、「お腹の赤ちゃんに良くないかも…」と拒む奈々に対し、「他の男に ヤラれっぱなしじゃ治まらねえ おまえは 何の心配もせずにおれの機嫌だけ取ってりゃいいから」(9巻)と言い、無理矢理性行為に及ぶ。こうしたタクミの暴力的な性行為の強要は、奈々の心に大きな傷となる。

「部屋に入るとタクミはいきなりキレて強引にあたしを抱いた タクミの異常な苛立ちはそれで収まる事を学んでいたから従った だけどそれは未来の為に許されたいからじゃなくて その瞬間の恐怖と煩わしさから逃れたいからだった 忘れかけていたあの時の絶望が蘇る」(13巻)

タクミと奈々の関係に対して、最も批判的な立場を取っているのがナナである。しかしナナとレンの関係もまた、奈々とタクミとほとんど差異はない。

タクミが全く避妊をしないのと同様に、レンもまた避妊をしない。

「違うよ！ ピルだよ！ 飲み忘れてらて一へんなんだよ いくら言っても てめえが避妊しねえから！ ガキが出来たらどーすんだ！」

「産んで育てりゃいーじゃん 俺は高校も行かずにマジメに肉体労働して来たから結構金持ちだぜ ガキの一人や二人全然平気」

「あんたが平気でもあたしは困る 今は子育てよりライブがしたい」（1巻）

インディーズからメジャーへとバンドの活動が移ると、ナナの「子育てよりライブがしたい」という願いはより強いものとなる。ところがレンは自分と同じアーティストとしての道を歩き出しているナナの願いよりも、「子どもが欲しい」という自身の願いを優先する。上京して再会した後もレンは避妊を拒否し、ナナは自衛のためにピルを飲むことを強いられるのである。

専業主婦である奈々とは異なり、ナナは歌手としての活動で多忙な日々を送っている。同業者であるナナとレンは、その意味において対等な立場であるにも関わらず、家事の担当はナナであるという役割が固定しており、それが変わることはない。どんなに疲れて帰ってきてもナナはレンのために食事を作り、レンはそういったナナの行動を止めることはあっても、自分が代わりに料理を担当しようとは考えないのである。

「だけど あたしはレンの為に 何をしてあげられただろう このままべつに歌なんか歌えなくなっても レンと一緒に東京へ行って レンの為に せめて毎日ごはんを作って部屋を磨いて レンの子どもを産んで そうするべきなのかもしれない それだって充分すぎる程の幸せじゃないか 家族のいない あたし達にとって 安らげる家を作る事は 夢を叶える事より 必要なはずなんだ」（1巻）

ナナの独白は、ナナの仕事（＝歌）と恋愛（＝家庭）の両立が不可能であることが前提とされている。そしてその前提は崩れることはない。何故ならば、ナナとレンの希望は相容れないものとして描かれているからであり、ここに『NANA』の表面上の過激な意匠とは別に、非常に保守的な少女マンガのイデオロギーを読み取ることが可能であろう⁶⁾。

家庭や家事は女性の領分である、という価値観は一貫している。ナナらのバンド・ブラックストーンズのマネージャーである諸星銀平は、作中において唯一家事らしいことを担当する男性であるが、彼はおねえ言葉を使うオカマである。屈強な身体と岩のような顔の男がフリルのエプロンをつけ、メンバーのために料理の腕を奮う。銀平でさえ、好きな男のために料理を作る、というステレオタイプの性役割からは逃れられないのである。

1.3 繰り返し描かれる「理想的な家族」像

『NANA』における男女の関係が非常に固定化されたものであり、しかもそれは対等ではなく非対等、上下の関係として描かれていることはすでに述べてきた通りである。しかし『NANA』において女性が男性よりも優位に立つ場合もある。それは、母親になることである。

『NANA』という作品の特徴の一つに、「親を欠いた家庭に出自を持つ子供達が多数登場」⁷⁾していることがあげられる。奈々、ノブ（ブラストのギター）、ナオキ（トラネスのドラマー）を除くと、作中に出自が明らかにされているキャラクターのほとんどが、片親もしくは孤児であり、両親が揃っていたとしても問題を抱えた家庭の出身者である。

母親と祖母に捨てられたナナ。母親は自殺し、残った父親から全く愛情を受けずに育ったシン。酒浸りの暴力的な父親と、その苦労のために早くに病死した母親を持つタクミ。幼児の時に港の倉庫に捨てられ、孤児院で育ったレンなど、事故や病気で親を失ったヤスとレイラ以外の親の設定は、非常に偏っている。

彼らに共通しているのは、自らの親に対して無関心を装いながら、本心では絶望し、憎悪しているということである。彼らの深層心理の中にある親への敵対心は、彼らの恋愛観や結婚観といった人格そのものへと直接的な影響を与えていく。

ナナは、母親に捨てられて育ったために子どもという存在に愛情が持てない。「母性本能って あたしよく分からないんですけど 普通は誰にでもあるものなんですか？」(8巻)と産婦人科医に聞くナナは、自分をまるで不完全な女であるかのように不安に思う。

奈々の夫となるタクミもまた、親の愛情を受けずに育った。

「レイラの澄んだ歌声は おれを取り巻く不穏な空気を 一時でも一掃してくれた 病で弱って行く母親への不安とか 酒に溺れて行く親父への不信とか おかげでグレート行く姉貴への不満とか おれは今でもカップラーメンが嫌い あれを食う位なら自分で作る」(18巻)

そんなタクミについて奈々は「タクミは何をやっても人並み以上の男だけど 人として大事な情がない」(13巻)と述べている。

親を欠いた家庭の出身者が心の闇を抱えているのに対し、彼らと対極的な描写がなされているのは、両親が揃った家庭に育った奈々、ノブ、ナオキである。

奈々は両親と妹の4人家族である。奈々の家族は作中において理想的な家族像として度々描かれている。ナナが奈々の実家に訪れた際、奈々の母親を見たナナは「理想の母親像」(4巻)と述べ、タクミもまた奈々の家族の会話を見て、「なんかテレビドラマ観てるみたい CM とか」(13巻)という感想を嬉しそうに述べている。

同棲当初は「人として大事な情がない」と評されていたタクミも、奈々との生活によって「キレイないし優しいし まあ相変わらずの所もあるけど前より人としてまともになって」(19巻)いく。そして自分の理想とする家族像について、妻である奈々に対して次のように語るまでに至る。

「これからは二人で外も出歩いて オフの日はおまえの好きな所に行こう 子供が生まれたら3人で 遊園地とか動物園とかフツーに連れて行ってあげたいし おれあんまりそーゆーのしてもらった事ねえから なんかベタな事しか思いつかねえけど 参観日行ったりとか運動会でビデオ撮ったりとか 男だったら公園でキャッチボールしたりとか？ そーゆー普通の親みたいな事 全部してやりたいし」(15巻)

ここでタクミが述べている「普通の親みたいな事」とは、「テレビドラマ」の中にしかいなかった「理想的な親」の姿であり、おそらくタクミ本人が子どもの頃に切望した「家庭」像であったろう。

このように、『NANA』はキャラクターの言葉を通して、理想的な「家族／家庭」像が多く語られている。そこで語られている「家族／家庭」像は決して突飛なものではない。ノブが「毎日腹いっぱい飯が食えるのも あったかい部屋で眠れるのも高校へ進学出来たのも 全部親のおかげだったのに あたり前すぎて 全くそのありがたみなんて分かっていなかったんだ」(16巻)と回想しているような、持っている者からすればあたり前すぎてありがたみさえないからなような、ありふれた「家族／家庭」像である。

親を欠いた家庭の出身者がどこか影のある性格であるのに対し、奈々、ノブ、ナオキは無邪気で優しく、そして明るい。奈々について、ナナは次のように語っている。

「奈々さんが 素直で明るくて優しくて 一緒にいると励まされます 思ってた通り 温かいご家族の元で育ったんですね」(4巻)

「あいつ(筆者注：ノブのこと)は昔から 素直で純粋で真っ直ぐだから あんたと同じ価値観で話せるでしょ」(7巻)

「ハチが そこで笑っているだけでなんとなく場が華やいで スタジオでもライブでもみんな活気づいた」(8巻)

ナナのセリフから読み取れるのは、健全な家庭の出身者は、イコール健全な精神や人格を形成する、という価値観である。作品を通して一貫して描かれているその価値観は、裏を返せば、健全な精神や人格は、健全な家庭でしか育ち得ない、というイデオロギーとして立ち現れてくる。そしてそのイデオロギーがあるが故に、ナナは、子どもを愛することが出来ないという自身の「欠陥」に怯え続けることになるのである。

深谷昌志による子育て意識についての調査によると、「母親から愛されて育てられた母親はスムーズな子育てをする」「歓迎されない妊娠は子育てに影を投げかける」という結果が明らかにされている⁸⁾。深谷自身、「あまりに当然の結論」だと指摘する結果であるが、『NANA』に表象されている「家庭像」が必ずしも前近代的な価値観に基づくものではないことの証左とも言えるだろう。

『NANA』において「母性」とは、決して揺らぐことのない普遍的かつ絶対的な愛情の形として描かれる。作中において最も理想的な母親として登場しているのは、奈々の母親である。ふくよかな体形の奈々の母親はお世辞にも美人とは言えない。しかし、「そんな暗い女が母親

じゃ子供がかawaiiそうだよ 自分の母親を見習いな」(8巻)と言われるように、常に笑顔を絶やさず、美味しい食事を提供するその姿は、どこにでもいる「普通の母親」を象徴している。

奈々の母親と対比的に描かれているのは、ナナの母親である。奈々の母親とは異なり、ナナの母親は美しい。しかし、

「ナナの為なんかやない… あたしがナナの為に… 自分を犠牲に出来ひんかっただけや ナナより子供嫌いのその男との暮らしを選んだんや あんな男の為に…」(20巻)

と告白しているように、ナナの母親は男のために自分が産んだ子どもを捨てた。子どもを捨てたということは、母であることを放棄したのと同義である。

奈々の母親は、奈々の理想でもある。奈々を「ママ」と呼んで慕うシンは、奈々の愛情を次のように表現する。

「だって僕の知ってる女の人達は みんな 僕の体だったり心だったりを欲しがるけど ハチは何も求めずにただ優しくしてくれるから そーゆーのって愛を感じるじゃない」(6巻)

奈々はナナやシンが理想とするほどには純真でもなければ、愛情に溢れている訳でもない。その証拠に、奈々は夫であるタクミに対して愛情や金銭的な援助をはっきりと要求している。奈々がシンに対して「何も求めない」のは、シンを男性としてではなく「子ども」として見ているからである。すなわち、奈々の性格は「母親」という役割を担っているか否かで、大きく異なっているのである。

このことは、奈々が妊娠するとより強調的に描かれる。妊娠以前の奈々は自分の気に入らないことや、予想外のことがあるとすぐに泣き喚いていた。しかし、妊娠後にはこうした性格が一変する。それまで男の顔色を伺い、従属的にしか生きていなかった奈々が、恐れの対象であったタクミに対して自分の意見をはっきり述べるようになる。そうした奈々の心情の変化は、泣いたシーン数にも現れている。図 1-2 は、主要な女性キャラクターである奈々、ナナ、レイラの泣いたシーン数を集計し、巻ごとの推移を示したものである。奈々の妊娠は8巻で明らかになるが、2巻の38回を頂点として、泣くシーンは全体的に下降傾向を示している。

奈々が妊娠する以前は、奈々よりも遥かに自立しているように描かれていたナナも、奈々が妊娠して以降は以前よりも奈々に対して説教をする機会も減って行く。それまで全く駄目な女として描かれていた奈々は、妊娠した、ということだけで一人前の女として描かれる。そしてその一方で、自分の夢のために恋愛を諦めて生きるナナやレイラは、現実と理想の間で揺れ動き、一向に安定を得られる様子がないのである。

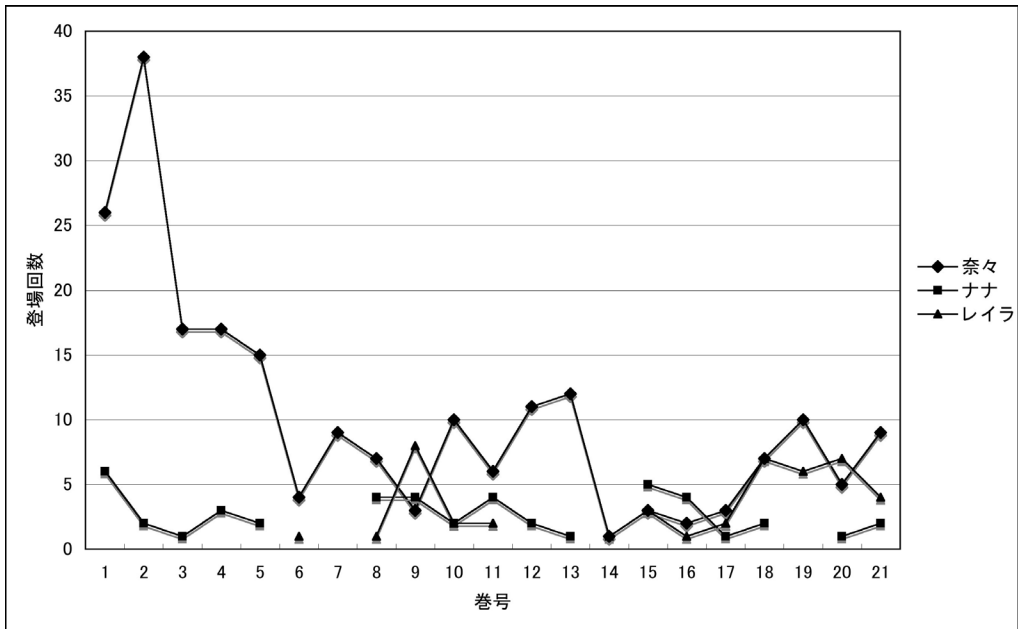


図 1-2 奈々・ナナ・レイラの泣いた回数の推移

3. 『NANA』は何故受け入れられたのか

矢沢あいによって描かれた『NANA』は、10代、20代の若者を中心に人気を博し、ゼロ年代を代表する少女マンガ作品と言えるだろう。『NANA』が何故これほどまでに受け入れられたのか、『NANA』という作品のどこに魅力があるのか。矢沢あいの描くファッションや、登場人物たちのリアルさなど、その理由は様々な観点から指摘することが出来るだろう。

『NANA』が他の少女マンガ作品と一線を画しているのは、恋愛関係となる男女が一对として描かれていない、という物語構造にある。奈々の場合、半年という短期間に肉体関係を含む恋人が三人も登場している。更に恋人関係にある者と、特別な感情がある者とが必ずしも一致していないという点もまた、『NANA』という作品の特徴の一つであると言えよう。複雑な人間関係の重なりは物語が進むにつれて解決していくというよりは、登場人物の数が増えれば増えるだけより複雑化していく。作中において唯一一对のカップルとして描かれているナナでさえ、レンの壮絶な事故死によってその恋愛は永遠に成就することは困難となった。すなわち、『NANA』には A というキャラクターが B というキャラクターと恋人になれば必ず幸せになれる、といった、かつての少女マンガが持っていたある種の分かりやすさが無いのである。

宮台真司は、「ある時代以降、少女マンガが、〈世界〉を読み〈私〉を読むための、〈関係性のモデル〉として機能し始めた」¹⁰⁾ことを指摘し、「サブカルチャー・メディアは、もはや『ありそうもない主人公』による『ありそうもない苦難とその克服』の〈代理体験〉ではなく、若い受け手が『これぞ、まさしく自分たちのことだ!』と想える、ありそうなく関係性モデル〉を提示するようになる」¹¹⁾と述べている。

奈々は言う。

「だいたい あたしの欲しい物っていったい なんだろう 章司との時間 かわいい服や雑貨 おしゃれな家具と部屋 どれも大事だけど 何か物足りない」(2巻)

「あたしに ふさわしい居場所なんて この世にあるのかな」(4巻)

エドガール・モランは、「イマージュは人が見ていると信じこんでいるものを、その人に見せている。想像的なものの本体は、心を含んでいる私たちの生、私たちの感情的な現実と混ざりあう」⁹⁾と述べている。好きになった異性と紆余曲折の末に必ず結ばれる、という少女マンガのセオリーは、確かに読者にラブストーリーを読む上でのカタルシスを提供するだろう。しかし現実の恋愛は必ずしもセオリー通りには運ばない。その意味において、多くの男性に恋をする過程において傷つき、時には別れを繰り返す奈々の姿は、読者の「リアル」と混ざり合い、共感されていくのだと考えられる。

実際、作者である矢沢あいも読売新聞のインタビュー記事において、「カリスマ的なカッコ良さの裏にもろさを秘めるナナと、ひたむきだが何かと考えの甘い、典型的現代っ子の奈々。どちらかに感情移入してくれるだろうと思ったのですが、実際は圧倒的に奈々。『ナナはあこがれの存在だけど、奈々は私自身』と感じる読者が多いことには驚きました」と述べており、当初の思惑とは異なり、読者たちがナナではなく奈々の方により共感を覚えたことに驚いている。

以上のような『NANA』の特徴を踏まえた上で、本研究では、『NANA』に表象されたジェンダーについて分析を行った。

分析の結果から明らかになった『NANA』の世界観は、女性は男性に従っていれば幸せになれる、言い換えれば男性に従わない女性は簡単に幸せを得ることは出来ない、という非常に男性中心的なものであった。また、女性は家庭に、男性は社会に、という役割分業が一貫して描かれており、女性は働く男性を癒すために家庭に入り、家事をこなし、子どもを育てることが推奨されている。

『NANA』に描かれている世界観を、前近代的なジェンダー観だとして批判することはたやすい。しかし、果たしてそれは正しいのだろうか。

筆者は拙稿¹²⁾において、手塚治虫の『リボンの騎士』以降、少女マンガが「戦う少女」のモチーフを繰り返し描いてきたことを指摘した。1950年代に登場した「戦う少女」は、作品が描かれた時代を反映しながら変遷してきた。しかし、様々な要素を付け加えられ描かれてきた「戦う少女」の描かれ方を精読していくと、社会や男性が付加した様々なジェンダー・カテゴリーから解放されているわけではなかったことが見えてくる。特筆すべきは、1990年代に描かれた作品において、新しい生命を産む母親としての側面が物語の焦点となったり、「聖なる力で邪悪なものを浄化する」といった「戦う少女」が登場している点である。これは初期の「戦う少女」には付与されていなかった新たな性別役割であり、ジェンダー・カテゴリーの再強化と見る事が出来る。

そしてその「再強化」は、本研究において明らかにした、女性の母性を究極的な理想像とする語り口と酷似するものである。

娯楽メディアのコンテンツは受け手と作り手の相関関係によって作られるものである。少女マンガは誕生以来、読者である少女の「欲望」を如実に表すメディアとして今日まで発展してきた。ゼロ年代を代表する作品である『NANA』において、ステレオタイプの男女関係、家族像、母親像が描かれているのならば、現在の読者たちが「それを求めているから」ではないだろうか。

何故、少女たちはジェンダー・カテゴリーから自身を解放するのではなく、保守へと回帰したのだろうか。今後の課題としたい。

注

- 1) 契約金に目が眩んでAV女優となった香坂百合、プライドばかりが高く売れない女優を続ける篠田美雨、親の金でナナに貢いでいた上原美里など。
- 2) 高井範子・岡野孝治, 2009, 「ジェンダー意識に関する検討：男性性・女性性を中心にして」, 『太成学院大学紀要 11』, 64p, 太成学院大学
- 3) 青野篤子, 1989, 「ジェンダー・ステレオタイプについての一考察」, 『松山東雲女子大学人文学部紀要 2』, 125p, 松山東雲女子大学・松山東雲短期大学
- 4) 注 2 前掲書、64p
- 5) 鈴木謙介, 2003, 「どうして恋をするだけでは幸せになれないのか-矢沢あいにおけるイノセント」, 『ユリイカ 35』, 106p. 青土社
- 6) 打田素之, 2010, 「『NANA』、あるいは引き裂かれる母と子の物語-少女マンガと母性の問題-」, 『研究紀要. 人文学・自然科学篇 51』, 63p, 神戸松蔭女子学院大学
- 7) 注 6 前掲書、59p
- 8) 深谷昌志, 『日本の母親・再考』, 183p, ハーベスト社
- 9) エドガール・モラン, 1971, 『映画 想像のなかの人間』, 256p, みすず書房
- 10) 宮台真司・石原英樹・大塚明子, 1993, サブカルチャー神話解体序説 少女マンガ・音楽・宗教から見た若者たち, アクロス編集室, 『ポップ・コミュニケーション全書 カルトからカラオケまでニッポン「新」現象を解明する』, 13p, パルコ出版
- 11) 注 10 前掲書、33p
- 12) 中川裕美, 2011, 「少女マンガの「戦う少女」にみるジェンダー規範-『リボンの騎士』から『美少女戦士セーラームーン』まで-」, 『現代社会研究科研究報告 第6号』, 愛知淑徳大学現代社会研究科